

苗箱削減による水稲の低コスト化を目指して（神石高原町）

【平成 28 年 5 月 31 日掲載】

神石高原町の(株)ヴィレッジホーム光末（光末幸司（みつすえこうじ）社長，構成員 7 名）（以下「同社」という。）では，水稲の低コスト化を図るため，使用箱数を大幅に削減する実証試験に取り組んでいます。これは通常の 2 倍の種子粃（300g）を 1 箱に播種して育てた苗を，ヤンマー株式会社が開発した高精度移植機を用いて，欠株の発生を抑え，使用箱数を従来の 3 分の 1 に減らす技術です。

平成 28 年 5 月 10 日の田植えでは，通常 10a 当たり 13 箱必要であるのに対し 4.3 箱にまで低減することができました。当日は福山法人協神石高原支部の水稲研修会も兼ねており，出席した町内 10 法人の担当者の関心は非常に高く，最後まで熱心に質疑応答が交わされました。この技術が実証されれば，育苗や田植えに必要な労働時間や育苗ハウスの面積を大幅に減らすこともできるため，同社の 30ha の水稲の育苗費を 150 万円程度低減することが可能となります。同社の光末社長は，「この技術の導入により，余剰となる育苗ハウスや雇用労働力を野菜などの品目導入が計画でき，収益性の向上につながる。」とこの技術に大いに期待を寄せています。

今回の育苗・田植えの結果から，苗質や欠株率が若干高いなどの課題は残るものの，低コスト化技術として極めて有望であることが確認できました。東部農業技術指導所では，今後生育・収量及び品質に関する調査を実施し，管内の大規模稲作経営体を中心に普及を図る予定です。



【 実証試験の様子と播種直後の苗箱の状況（左下） 】

情報提供元

東部農業技術指導所